

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 08-114359
 (43)Date of publication of application : 07.05.1996

(51)Int.Cl.
 F25B 13/00
 F25B 13/00
 F24F 11/02
 F25B 1/00
 F25B 1/00

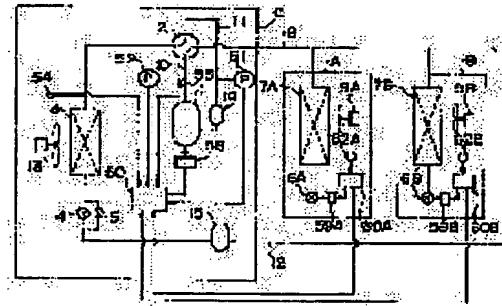
(21)Application number : 06-275647
 (22)Date of filing : 15.10.1994
 (71)Applicant : MITSUBISHI HEAVY IND LTD
 (72)Inventor : HIRAO TOYOTAKA
 KITAGAWA KATSUTOSHI

(54) AIR CONDITIONER

(57)Abstract:

PURPOSE: To prevent too much and too little circulating amount of refrigerant irrespective of the number operating indoor device during a heating operation, prevent the refrigerant from generating its flowing sound in a stop mode and further prevent an indoor temperature from being increase in an air blowing mode.

CONSTITUTION: There are provided means 51, 52, 53 and 54 for sensing the suction pressure, the discharging pressure of a compressor 1, the discharging pipe temperature and the ambient temperature; means for measuring the refrigerant circulating amount according to detected values of these sensing means; means for calculating a discharging pressure set value based on the value of the measured refrigerant circulating amount; and a discharging pressure control means for controlling the discharging pressure so that it may be equal to the calculated discharging pressure set value.



(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平8-114359

(43) 公開日 平成8年(1996)5月7日

(51) Int.Cl [®]	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
F 25 B 13/00	104	M		
		N		
F 24 F 11/02	102	T		
		E		

審査請求 未請求 請求項の数2 FD (全6頁) 最終頁に統べ

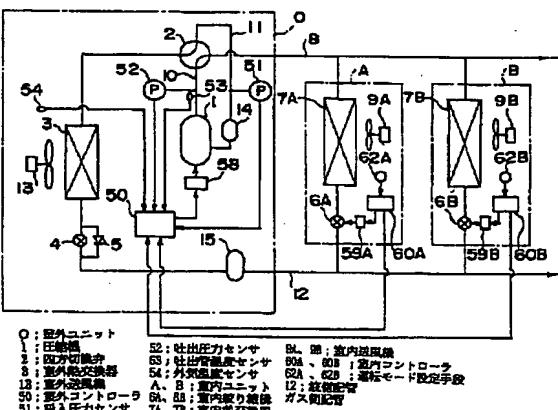
(21) 出願番号	特願平6-275647	(71) 出願人	000006208 三菱重工業株式会社 東京都千代田区丸の内二丁目5番1号
(22) 出願日	平成6年(1994)10月15日	(72) 発明者	平尾 豊隆 名古屋市中村区岩塚町字高道1番地 三菱 重工業株式会社名古屋研究所内
		(72) 発明者	北川 勝敏 愛知県西春日井郡西枇杷島町字旭町三丁目 1番地 三菱重工業株式会社エアコン製作 所内
		(74) 代理人	弁理士 菅沼 徹 (外2名)

(54) 【発明の名称】 空気調和機

(57) 【要約】

【目的】 暖房運転時、室内ユニットの運転台数の如何に拘らず冷媒循環量の過不足を防止し、かつ、停止モードにおける冷媒流动音及び送風モードにおける室内温度の上昇を防ぐ。

【構成】 圧縮機1の吸入圧力、吐出圧力及び吐出管温度並びに外気温度を検出する手段51、52、53、54と、これら検出手段の検出値に基づいて冷媒循環量を判別する手段55と、判別された冷媒循環量の大小に基づいて吐出圧力設定値を演算する手段56と、この演算された吐出圧力設定値となるよう吐出圧力を制御する吐出圧力制御手段57とを設けた。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 圧縮機、四方切換弁、室外熱交換器、室外送風機等を具備する1台の室外ユニットに対して、室内熱交換器、その液側に設置された室内絞り機構、室内送風機等を具備する複数台の室内ユニットを液側配管及びガス側配管を介して並列に接続し、上記複数台の室内ユニットを冷房又は暖房運転し得る空気調和機において、上記圧縮機の吸入圧力、吐出圧力及び吐出管温度並びに外気温度を検出する手段と、これら検出手段の検出値に基づいて冷媒循環量を判別する手段と、判別された冷媒循環量の大小に基づいて吐出圧力設定値を演算する手段と、この演算された吐出圧力設定値となるよう上記圧縮機の吐出圧力を制御する吐出圧力制御手段とを備えたことを特徴とする空気調和機。

【請求項2】 上記吐出圧力制御手段は上記圧縮機の回転数及び又は上記室内絞り機構の開度を制御する手段からなることを特徴とする請求項1記載の空気調和機。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は複数台の室内ユニットを冷房又は暖房運転し得る空気調和機に関する。

【0002】

【従来の技術及びその課題】 従来のこの種空気調和機の1例が図5に示されている。図5において、○は室外ユニットで、圧縮機1、四方切換弁2、室外熱交換器3、室外送風機13、室外絞り機構4、逆止弁5、レシーバ15、アキュムレータ14を具備している。

【0003】 A、B、Cはそれぞれ室内ユニットで、室内ユニットAは室内熱交換器7A、室内絞り機構6A及び室内送風機9Aを具備している。また、室内ユニットBは室内熱交換器7B、室内絞り機構6B及び室内送風機9Bを具備している。同様に、室内ユニットCは室内熱交換器7C、室内絞り機構6C及び室内送風機9Cを具備している。これら複数台の室内ユニットA、B、Cは室外ユニット○に対して液側配管12及びガス側配管8を介して並列に接続されている。

【0004】 この空気調和機の冷房運転時には、四方切換弁2は破線で示すように切り換えられる。すると、圧縮機1から吐出されたガス冷媒は吐出管10、四方切換弁2を経て室外熱交換器3に入り、ここで室外送風機13によって送られた外気に放熱することによって凝縮液化する。

【0005】 この液冷媒は逆止弁5、レシーバ15、液側配管12を経て室内ユニットA、B、Cに並列に流入し、その室内絞り機構6A、6B、6Cを通過する過程で絞られることにより断熱膨張した後、室内熱交換器7A、7B、7Cに入り、ここで室内送風機9A、9B、9Cによって送られる室内空気を冷却することによって蒸発気化する。このガス冷媒はガス側配管8、四方切換弁2、吸入管11、アキュムレータ14を経て圧縮機1に戻る。

【0006】 空気調和機の暖房運転時には、四方切換弁2は実線で示すように切り換えられる。すると、圧縮機1から吐出された冷媒は吐出管10、四方切換弁2、ガス側配管8、室内熱交換器7A、7B、7C、室内絞り機構6A、6B、6C、液側配管12、レシーバ15、室外絞り機構4、室外熱交換器3、四方切換弁2、吸入管11、アキュムレータ14をこの順に経て圧縮機1に戻る。

【0007】 複数台の室内ユニットA、B、Cの中一部の室内ユニット、例えば、Aを停止モードとする場合には、室内絞り機構6Aは全閉とされ、かつ、室内送風機9Aが停止される。また、この室内ユニットAを送風モードとする場合には、室内絞り機構6Aは全閉とされ、かつ、室内送風機9Aが駆動される。

【0008】 室外ユニット○の能力は複数台の室内ユニットA、B、Cの運転台数及び運転中の室内ユニットの空調負荷に応じて圧縮機1の回転数及び室外送風機13の回転数を変更することによって調整される。

【0009】 この空気調和機においては、圧縮機1の吐出圧力が変化すると、高圧側ガス冷媒の密度が変化するため、図6に示すように、冷媒回路内各部の冷媒循環量が変化する。

【0010】 一方、この空気調和機の暖房運転中、複数台の室内ユニットA、B、Cの中の一部、例えば、Aを停止モード又は送風モード（以下、休止モードと言う）とすると、その室内絞り機構6Aが室内熱交換器7Aの液側に設置されており、かつ、これが全閉とされるので、室内熱交換器7A内に入ったガス冷媒が液化して溜り込む。

【0011】 従って、暖房運転時室内ユニットの運転台数の変化により休止中の室内ユニットの室内熱交換器内に溜り込む液冷媒量を考慮した必要冷媒量は図7に示すように変化する。しかるに、この空気調和機の冷媒回路内に封入されている冷媒量は一定であるため、室内ユニットの運転台数に応じて、図に斜線範囲で示すように、循環冷媒量の過不足が生じる。

【0012】 これを回避するため、冷媒回路内に多量の冷媒を封入し、室内ユニットの運転台数が多い場合に発生する余剰の冷媒をレシーバ15又はアキュムレータ14内に貯めて置くようになっていたが、これは冷媒封入量が多く、かつ、レシーバ15又はアキュムレータ14が大形となるので、コストが嵩むという問題があった。

【0013】 そこで、暖房運転中休止モードの室内ユニット、例えば、Aの室内絞り機構6Aを微少開度として、微量の冷媒を通過させることにより室内熱交換器7A内に液冷媒が溜り込むのを防止していたが、停止モードの場合、室内送風機9Aが停止しているので、室内絞り機構6Aを通過する冷媒流動音が気になる。また、送風モードの場合、室内送風機9Aが運転されるので、室内熱交換器7Aは暖房能力を発揮し、室内温度が上昇してしまうという不具合があった。

【課題を解決するための手段】本発明は上記課題を解決するために発明されたものであって、その要旨とするところは、圧縮機、四方切換弁、室外熱交換器、室外送風機等を具備する1台の室外ユニットに対して、室内熱交換器、その液側に設置された室内絞り機構、室内送風機等を具備する複数台の室内ユニットを液側配管及びガス側配管を介して並列に接続し、上記複数台の室内ユニットを冷房又は暖房運転し得る空気調和機において、上記圧縮機の吸入圧力、吐出圧力及び吐出管温度並びに外気温度を検出する手段と、これら検出手段の検出値に基づいて冷媒循環量を判別する手段と、判別された冷媒循環量の大小に基づいて吐出圧力設定値を演算する手段と、この演算された吐出圧力設定値となるよう上記圧縮機の吐出圧力を制御する吐出圧力制御手段とを備えたことを特徴とする空気調和機にある。

【0015】上記吐出圧力制御手段を上記圧縮機の回転数及び又は上記室内絞り機構の開度を制御する手段から構成することができる。

【0016】

【作用】本発明においては、圧縮機の吸入圧力、吐出圧力及び吐出管温度並びに外気温度の検出値に基づいて冷媒循環量を判別する。そして、判別された冷媒循環量の大小に基づいて演算された吐出圧力設定値となるよう圧縮機の吐出圧力を制御する。

【0017】

【実施例】本発明の1実施例が図1ないし図4に示され、図1は系統図、図2は制御ブロック図、図3は制御フローチャート、図4は冷媒レベルと吐出圧力設定値変化量との関係を示す線図である。

【0018】図1に示すように、圧縮機1の吸入圧力を検出する吸入圧力センサ51、圧縮機1の吐出圧力を検出する吐出圧力センサ52及び圧縮機1の吐出管10の温度を検出する吐出管温度センサ53及び外気温度を検出する外気温度センサ54が設けられている。これらセンサ51、52、53、54の検出値は室外コントローラ50に入力され、この室外コントローラ50は駆動手段58を介して圧縮機1に出力してその回転数を制御するようになっている。

【0019】室内ユニットAには運転モード設定手段62Aが設けられ、その設定モードは室内コントローラ60Aに入力される。同様に、室内ユニットBには運転モード設定手段62Bが設けられ、その設定値は室内コントローラ60Bに入力される。これら室内コントローラ60A、60Bは室外コントローラ50に接続されている。

【0020】これら室内コントローラ60A、60Bは絞り駆動手段59A、59Bを介して室内絞り機構6A、6Bに出力してその開度を制御するようになっている。その他の図示しない室内ユニットも同様である。

【0021】図2及び図3において、制御がスタートすると、予め定められたサンプリングタイム毎に吸入圧力センサ51、吐出圧力センサ52、吐出管温度センサ53、外

気温度センサ54によって圧縮機1の吸入圧力Ps、吐出圧力Pd、吐出管温度Td、外気温度Taoが検出される。

【0022】検出された吸入圧力Ps、吐出圧力Pd、吐出管温度Td、外気温度Taoは室外コントローラ50の適正冷媒量判別手段55に入力され、ここで冷媒循環量の過不足のレベルLが判別される。

【0023】例えば、圧力比(Pd/Ps)absが設定値、例えば、4以上で、吸入圧力Psが設定値、例えば、300kPa以下で、かつ、吐出管温度Tdが設定値、例えば、100°C以上の場合には冷媒レベルLは-1と判別する。(ただし、外気温度Taoにより上記各設定値は補正される。)

【0024】例えば、(Pd/Ps)abs > 4.5以上、Ps < 250kPa、かつ、Td > 110°Cならば、冷媒レベルLは-2と判別し、同様に冷媒量過多の場合もPd > 1.5MPa、かつ、Td < 70°Cなら冷媒レベルLは+1と判別される。

【0025】なお、冷媒レベルLは-3(不足大)、-2(不足中)、-1(不足小)、0(適当)、+1(過多小)、+2(過多中)、+3(過多大)が用意されている。

【0026】この判別された冷媒レベルLは吐出圧力設定値演算手段56に入力され、かつ、吐出圧力センサ52から吐出圧力Pdが入力される。この吐出圧力設定値演算手段56には図4に示すような特性が記憶されており、これに基づいて吐出圧力設定値Spが決定される。

【0027】即ち、吐出圧力Pdが変化すると、高圧側ガス冷媒の密度が変化することに着目し、図4に示すように、冷媒量が不足の場合は、検出された吐出圧力Pdより吐出圧力設定値Spを低くし、冷媒量が過多の場合には、吐出圧力設定値Spを高くして循環冷媒量を冷媒封入量に近づける。

【0028】決定された吐出圧力設定値Spが吐出圧力制御手段57に入力すると、吐出圧力制御手段57はこれに基づいてPID制御演算することによって圧縮機1の駆動周波数、即ち、回転数を決定し、これを圧縮機駆動手段58を介して圧縮機1に出力してその回転数を変更することによって吐出圧力Pdを吐出圧力設定値Spに近付ける。

【0029】吐出圧力設定値Spと検出された吐出圧力Pdとの差が大きい場合、即ち、|Sp - Pd| > 0.2MPaで、Sp - Pd > 0であれば、室内絞り機構の開度Xを20ステップだけ増大する旨を決定し、Sp - Pd < 0であれば、室内絞り機構の開度Xを20ステップだけ減少することを決定する。

【0030】この決定値は絞り駆動手段59A、59Bを介して室内絞り機構6A、6Bに出力され、その開度を制御することにより吐出圧力Pdを吐出圧力設定値Spに近付ける。

【0031】なお、暖房運転時における吐出圧力Pdは主に室内ユニットの空調負荷と室内熱交換器7A、7B——に流入する冷媒流量によって決まるが、冷媒流量を操作することにより吐出圧力Pdを制御することができる。従つ

て、圧縮機1の回転数、即ち、吐出量を変化させる方法、室内絞り機構6A、6B——の開度を変化させる方法のいずれか一方又は双方によって吐出圧力Pdを制御することができる。

【0032】

【発明の効果】本発明においては、圧縮機の吸入圧力、吐出圧力及び吐出温度並びに外気温度の検出値に基づいて冷媒循環量を判別し、判別された冷媒循環量の大小に基づいて演算された吐出圧力設定値になるよう圧縮機の吐出圧力を制御するので、暖房運転時、室内ユニットが停止モードや送風モードになった場合でも室内絞り機構を全閉としうるので、冷媒循環量の不足を起こすことはなく、また、停止モードにおける冷媒流動音、送風モードにおける室内温度の上昇を防ぐことができる。

【0033】また、小型のアキュムレータ、レシーバの採用が可能となるので、コストダウンが図れる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の1実施例に係る空気調和機の系統図である。

【図2】上記第1の実施例の制御ブロック図である。

【図3】上記実施例の制御フローチャート図である。

【図4】上記実施例における冷媒レベルと吐出圧力設定値変化量との関係を示す線図である。

【図5】従来の空気調和機の系統図である。

* 【図6】吐出圧力と冷媒循環量との関係を示す線図である。

【図7】室内ユニットの運転台数と冷媒量の関係を示す線図である。

【符号の説明】

○ 室外ユニット

1 圧縮機

2 四方切換弁

3 室外熱交換器

13 室外送風機

50 室外コントローラ

51 吸入圧力センサ

52 吐出圧力センサ

53 吐出管温度センサ

54 外気温度センサ

A、B 室内ユニット

6A、6B 室内絞り機構

7A、7B 室内熱交換器

9A、9B 室内送風機

20 60A、60B 室内コントローラ

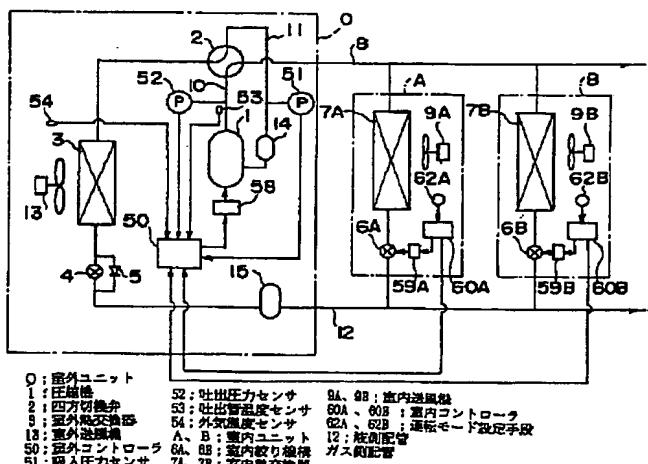
62A、62B 運転モード設定手段

12 液側配管

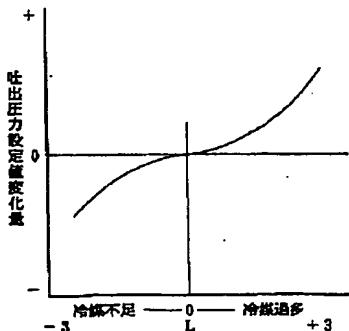
8 ガス側配管

*

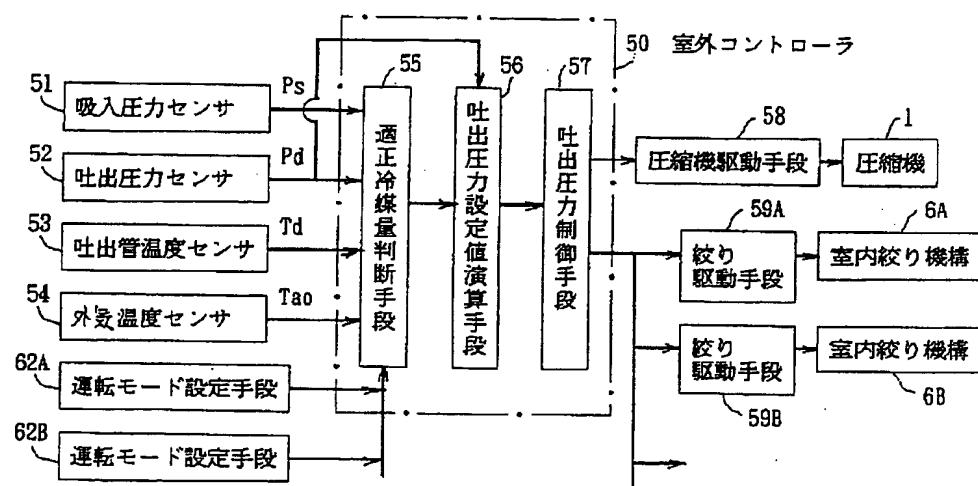
【図1】



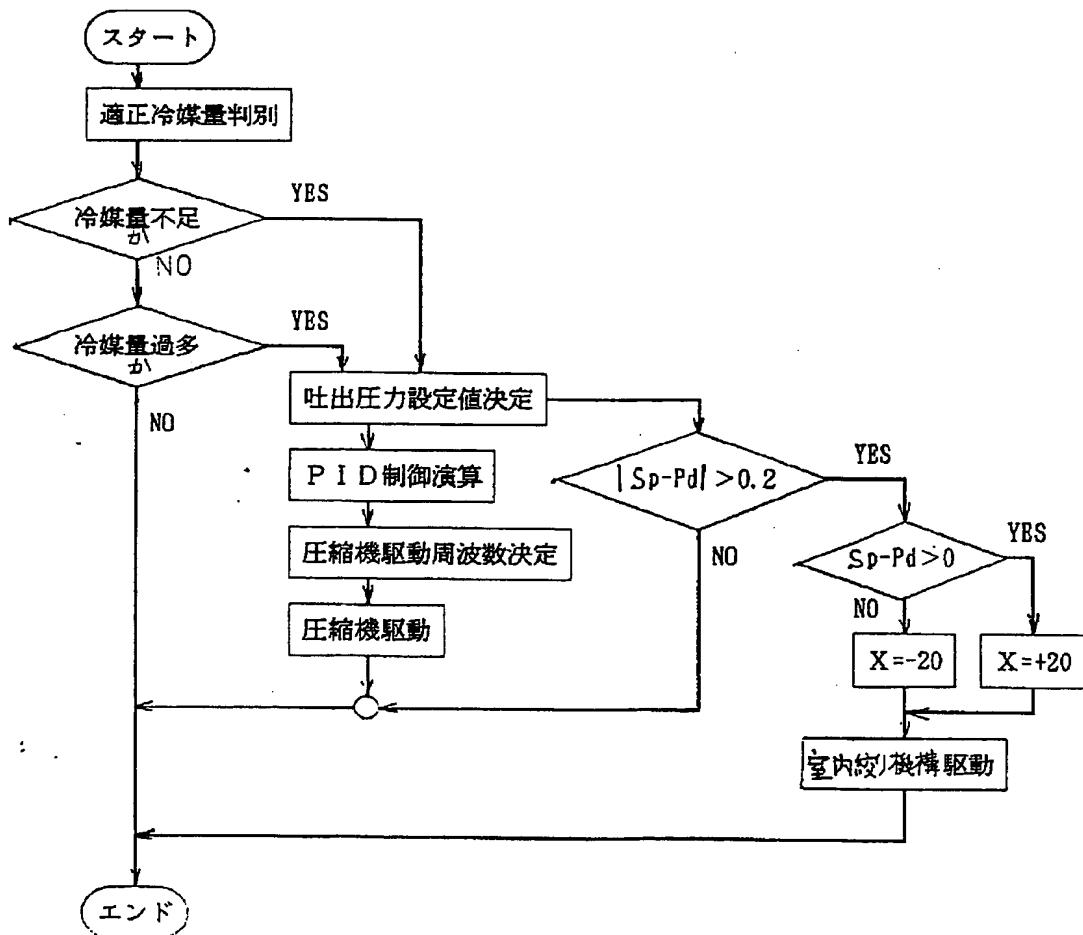
【図4】



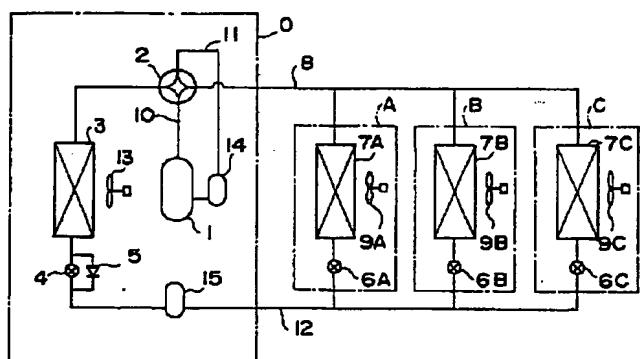
【図2】



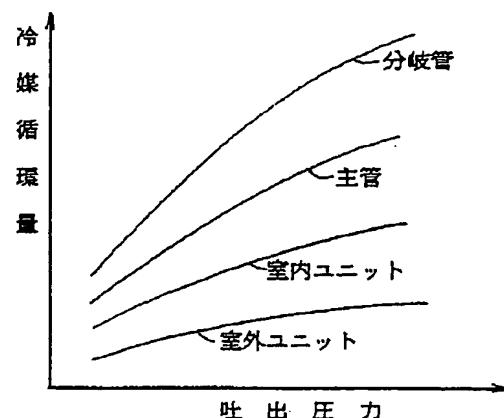
【図3】



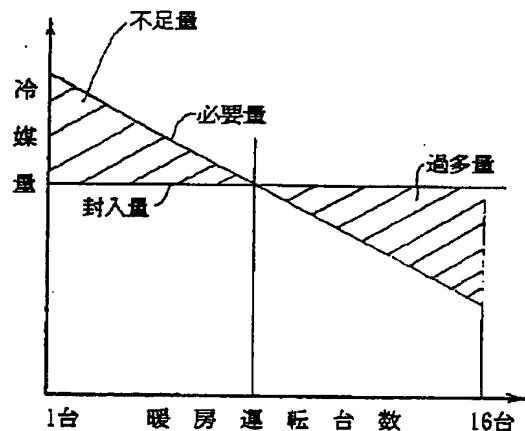
【図5】



【図6】



【図7】



フロントページの続き

(51) Int.CI.⁵

F 24 F 11/02

F 25 B 1/00

識別記号 戻内整理番号

F

304 F

371 J

F I

技術表示箇所